

● 高澤良一 第七句集 宿好

● 七月―九月

ぷくぷくの素足むんずと赤子立つ
濡縁に落梅三つ四つ寄せてあり
アトリエを包む潮騒花ダチュラ
サーファアの臀部凜々しく南風吹く中
葎切の直談判が続きをり
ほうたるの自家発電の灯の明し
ほたるにも戀の鞘当てありぬべし
ぶらさがり咲きが得手なり花ダチュラ
河童忌の横須賀海軍カレー食ぶ
鱒上高地ぐらとその向き変へる翳涼し
すれ違ふ蹠の涼大正池
カルピスを喫し涼める上高地
夏川に手を突っ込んでつめたしと
驟雨来て朝の大正池壊す
上高地降られに寄ったやうなもの
偽八ヶ岳へ兜虫かぶと飛んだりまっしぐら
日雷電関の碑いしづみに
涼奏奏鳴館でオルゴール(オルゴール博物館)函シンフォニオン
白雨抜け泊りは星の白馬村
お花畑雨も疾走虻も疾走
ガレ場白馬岳 八方尾根あり奈落より現る高山蝶
真上より天つ日ハッポウウスユキソウ
溪寄りの脇道閉鎖チングルマ
二株のハクサンシヤジンケルンに待す
草臥れて瓦礫に座せばベニヒカゲ
遠雷が一つ鳴りゐて下山道
山小屋の窓辺に蠅の頓死せり
驟雨来空ゴンドラを送りけり

登ってさんざん下りてさんざん岳夕立
兎平駅にて夕立遣り過ぐす
珈琲を喫せりロツヂ「五千尺」
アマニユウとアマニユウの間雪溪見ゆ
風の道即ち松虫草の道
混むでもなくまばらでもなく吾亦紅
ガレ場にて嘎れしこゑの昼の虫
後ろより兀と迫れる登山靴
積まれたる石の放熱夏空に
ふらふらと頭の上にくる岳蜻蛉
おむすび喰ふ肱を廻りて山の蟻
足垂らし涼みあるなりケルンの端
ケルン経て風届くなり車百合
岳蜻蛉日差しの強さ知ってをり
太陽は真近しエチゴキジムシロ
時かけて風の第三ケルンまで
夏の露ころりと白馬岳快晴
オオバギボウシ白雲翳り易くして
露は凝りゐたりタテヤマウツボ草
白雲の雲影よぎるカラマツ草
雪割草風透き通るこの辺り
雪溪の風の抜け口おお涼し
チングルマ好みの風が吹いてをり
見晴らしは兎も角雪溪よぎるとせん
雪溪の舌の先なるチングルマ
マンモスの臼歯のやうな岩に蝶
トラノオのその先霧の粗く飛ぶ
アマニユウにピカッとザザッと降るわいな
エゾホソイ山雨傍若無人なり
やたら落ち田舎っぺえのはたた神

雨脚のみるみる太しオヤマソバ
ウメバチソウ我等向き合ひ昼餉とる
ハクサンフウロガレ場の風に煽られて
八方尾根下山がたがた蝶番
健脚なご婦人トリアシシヨウマの辺
ハクサンシャジンリフト減速して頂上
お花畑雲の空中散歩かな
登り来てモウセンゴケに顎出しぬ
シヨウマ等ちらちら兎平かな
トレッキングシューズの先の岩鏡
白馬山麓星夜天然冷房裡
驟雨来ぬ白馬の美田輝かせ
スキー場写真真木造リフトの世
夏白馬村細野諏訪社の露払ひ諏訪社の五兵衛杉
北安曇野月夜高吟小田蛙
武甲山どんと構えて夏休
紅花隠元咲けば秩父に盆が来る
札所寺大鉢に生ふ布袋草
堂縁に一つ載せあり蟬骸
かんかん照り雀翔つさへ億劫な
灸花七番寺へ喘ぎ坂
巡礼の秩父はかんかん照りの道
秩父事件蜂起の鐘を蟬抱き
流燈長瀬のライン下りとなりにけり
急湍にかかる流燈間合詰め
流燈の二つひつつき流れけり
流燈の脈打つごとく打過ぎぬ
闇より手伸び来て流燈すいと押す
流燈はおのが道筋照らしゆく
流燈のひかひか川面照らしゆく

瞬けば流燈もまた瞬ける

うつすらと水明り流燈そこを過ぐ

佳き地名ありてふつと

山峡の風戸で降りて鮎を釣る

虫送り嶺に張りつく二集落

虫送り竹竿に鉦ぶるさげて

あきあかね先導つとむ虫送り

虫送り五色のノロセ持ち寄りて

盆がらを追ひやる掛け声山里に

山風に「ようづの虫も送るヨイ」

ゆく雲に「はやりの虫も送るヨイ」

盆がらにあらざる秋津里に殖え

虫送り撮りにケーブルテレビ局

村の衆手拭い首に虫送り

秩父神社 やごころおもいかねのみこと

蝸聞き八意 思兼命

札所寺二番で降られ夏の雨

青栗にさしもの秩父の雨上がる

こんにやくの茎しげしげと見て秩父

早稲の香の沸きかへる中巡礼道

札所寺百日紅に汗退けり

団扇など置きてもてなす札所寺

団扇風いただき一番札所寺

青田風吹き込む三番札所寺

街道はこれから灼けむ露葎

百日紅どうれと山門潜りけり

大滝村桑が長じてしまひけり

風船かづら祖霊送りに済ませしよ

しようりようばった一巡りしてわが足許

花火見る旅も山下清めく

揚花火どんと武甲山の肩を突き

昇りつむ花火の青息吐息かな

両神山を指呼に頂上涼み台
湧く雲も胡麻の花いろ奥秩父
水団終戦日腹毎日あれから五十年
水団の戦後生まれを自認せり
水を張る手も逸りけり金魚鉢
曝書などせんとて一念発起の日
水を撒く母がもつともせずしさう
麦湯煮ることに精出す妻なりき
妻の夏吾が夏一つ屋根の下
年金の出る齡となり鳩麦茶
麦湯飲み暑さ負けせぬ夫婦なり
鳩麦を加ふ麦湯の香なりけり
栗の樹下髪を叩いて蟻落す
風鈴の広長舌を聞き遣るべし
職引きて麦湯の湯気のやうな日々
仕事人間止めて風鈴吊る家に
蝉の穴ホーチンミンも斯く潜み
虫瘤の意気壮んなり真炎天
じり貧と云ふ鳴き方をせる蝉も
定年だあ定年だあと蝉啼くも
捕れたかと云へば虫籠掲げ見す
花火音立て込む家に訝して
花火にも前座・真打ちありにけり
片陰ゆくハローワークの呼び出し日
海水着はちきれさうよ如来肌
蒲焼きなど母に奢ろうかとおもふ
鰻召せ長寿の因もとの鰻召せ
シンクロナイズドスイミング咲かす四肢の花
ダイビング黄膚台頭アジア勢
大井川葛は暴走して止まず

月端はなの蟬せみごゑ何処か衰へし
朝顔の遅まき咲といふがほと
芙蓉淡々同窓会の日が近む
秋草も黄勝ちの野草摘みとりぬ
霧の中霧に日当る一所
踊り手八尾の風の盆が町に戻りて風の盆
坂の町足のむくま風の盆
石垣の上の町並み風の盆
川の音おわら流しの遠ざかる
おわら見て二階に風の通る家
風の盆朝顔の葉に灯の洩れて
足そろと運びておわら流しかな
おわら流しふらりと出でて町流す
太棹の影が法被に風の盆
夕顔とおわら流しの宵迎ふ
町衆の趣向の法被風の盆
おわら流し橋で一息入れゆけり
くらがりに鈴虫を飼ふ風の盆
編笠も月を象かたどる風の盆
団扇風妻より貰ひ風の盆
風おさまる如く豊年踊果つ
紅引いておわら流しの出を待つ娘こ
夕顔に胡弓漂ひ初めにけり
おわら流し折り目正しき手の捌き
佳き風が出て来ておわら流しどき
素通しに川原の見ゆる盆の家
聞名もんみやうじ寺堂縁借りておわら節
一寸手を空に合はせて女めの踊り
揃え脱ぐおわら流しの草履に名
今町のおわら流しの浴衣柄

黒羽二重法被衣桁に風の盆
八尾びと路地先に据ふ涼み台
一息に唄ひ切らねば風の盆
細き路地大きく使ひ総流し
おわら流しここで一服私も一服
おわら流しころと川原の石鳴れり
旅先の加賀の地酒に蓮の実
卯辰山前に白萩うねり初め
東尋坊美しやビールの泡透けて
東尋坊岩間に昼の虫音澄み
切り刻むビュッフェの描線卓と百合
描線の威嚇と攻撃巴里凍つる
冬景色殊にビュッフェの垂直線
青芭蕉鍋木清方煽らるる日の清方展
清方のほゞづきの絵のほゞづき鳴る
清方の八百屋お七の紅の涼
蛸をまどろみの中暮れて来し
かまつかの彩なかなかに鄙ぶ寺
秋口に降りては埃くさき雨
きゅっと鳴る紅茶の砂糖秋の昼
つきだしに水もしたたる新豆腐
竜淵に潜みとろんと紹興酒
包み込むやうに秋雨降り出しぬ
澄み澄みて水も心も方円に
しがらみの地縁人縁まんじゅさげ
雨のあと直ぐ日が射して雁来紅
肝張っていきいき鳴ける朝の虫
羽蟻墜つ奇妙な夜となりにけり
うげんの宙ぶらりんや糞暑し
昼月をあふぎ海月の波枕

庭石を二つ渡しし良夜なる
今日の月三溪園の松越しに
月記る芒に添えてゑのころも
観月会琵琶の音締めを襖越し
颱風のたてこんでくるこの時分
颱風の道草食うて近畿道
颱風のアップパーカット喰らふ軒
内々の話にも触れ菊脛
翹ひろぐうすばかげろうガレの壺
雑俳と諸作っても作っても
ひっひつと聞こえて遠きちの秋の蝉
腹立つとみえて螳螂斧振り上ぐ
安んずること木守に及ばざる
虻去るとはつかに石落の独り言
秋風にひとり歩きの嘘往けり
何處となく色づいて来ぬ瘤櫛
不細工は不細工なりにもみづれり
等類の右へならへに倦む秋夜
燈火親しめず雲脂より軽き句に
長き夜のどうでもよき句は読み飛ばす
そのかみの力士と云へば名寄岩
ほればれとするあんこ腹鏡里
東海の弓取り上手大岩山
あんこ形力士あづくるあんこ腹
かうなれば小細工効かぬ四つ角力
秋場所の力相撲となりけり
突っ張ってはたいていなす技てが効いて
舞ノ海大きな相撲取りにけり
横綱の巨きな張り手飛んでくる
どうにでもなれと当るが勝角力

尻はたきここ一番の大相撲

解説は相撲巧者の舞ノ海

勝ち越しのすまふに花を添えにけり

負越しの土俵勤むも後二番

横綱を取って投げたる晴姿

投げられて口をへの字の武蔵丸

踏み込んでやうやく初日しよいちの出るすまふ

待ったなしうるさきすまふ取る同志

持ちまえのがむしやらが出て負相撲

立て込める黒星同志「はっけよい」

好調は躰に任せとる相撲

乾坤の当りに懸けぬ土佐ノ海

俳諧に我も自分の相撲とる